bunka@ryukyushimpo.co.jp
TEL 098-865-5162

サーチライト

日本の今問う「はて？」
フェミニズム、憲法、民主主義
朝ドラ「虎に翼」へ共感

夫婦別姓

口癖は「はて？」―。NHK連続テレビ小説「虎に翼」が反響を呼んでいる。主人公・寅子のモデルは日本初の女性弁護士の一人で、判事になった三淵嘉子さん（1914～84年）。フェミニズム、憲法、民主主義などを真正面から捉え、法曹界に飛び込んだ女性の挑戦と葛藤を活写する。

物語の始まりは昭和初期。しかし熱心な視聴者を公言する有識者3人に話を聴くと、そこに浮かび上がるのは日本社会の「今」だと口をそろえる。

NHK連続テレビ小説「虎に翼」より

対した神保教授に、寅子は「はて？」と問う。「息子さんが結婚して妻の氏を名乗ることにされたら、息子さんの神保さんへの愛情は消えるのですか？」と。

このせりふに感動したと振り返るのは、今年4月に日弁連で初の女性会長に就いた渕上玲子さん。「親と子の姓が違っても愛情は変わらない。寅子の言葉こそ、今議論されている選択的夫婦別姓の考え方です」。史実と現代の課題とを地続きにした脚本に拍手を送る。

「戦後、失意の寅子は、焼き鳥を包む新聞紙に書かれた新しい憲法の条文に気付く。すばらしいドラマだと思った」と語る渕上玲子さん

33年に認められ、40年に三淵さん、久米愛さん、中田正子さんが弁護士登録。女性法曹が誕生した。だが渕上さんが登録した83年でも弁護士の女性比率は約4％。今は20％を超えたが、男女の賃金格差など、ジェンダー平等への道は半ばだ。

男性優位の社会でもがく寅子の姿に「自分の経験が重なる」と渕上さん。寅子の行動にじむ「後に続く女性たちのために…」という思いに共感する。「すてきな朝ドラが味方になってくれた」

「虎に翼」のロケ地となった名古屋市市政資料館で記念撮影する山内マリコさん＝2024年４月

加害者性

作家の山内マリコさんは「見る人の価値観を揺さぶる作品」と語る。例えば、リベラルな男性として登場する法学者の穂高教授が、寅子の妊娠を知ると当然のように仕事を辞めるよう促し、寅子はショックを受ける。「こういう人は現代にもいる。古い時代を描いているように見えて、完全に今を描いている」

男性の女性差別的な言動をストレートに見せる点も「加害者性を漂白せずに表現しなければ、時代のリアルや罪深さに向き合うことはできない」と評価。よく見ると、女学校時代に寅子がすれ違う少女が男子にいじめられている演出も。丁寧に背景を描くことで「既婚女性を『無能力者』と見なす当時の民法に寅子が怒り、法律家を目指す動機にも説得力があった」。

河野真太郎さん

「願い」

「丹念な時代考証による物語と、現代人も親しみやすいキャラクター作り。『二刀流』の魅力が、この作品を昔話にさせない。脚本に抜け目がない」。そう称賛するのは専修大教授（英文学）の河野真太郎さん。特に寅子を取り巻く男性たちの描き方に注目してきた。

NHK連続テレビ小説「虎に翼」より

頼りない父や、大学で男尊女卑的だった同級生の轟、花岡…。「それぞれに欠点、有害な男性性を持つが、他者と関わって変わっていく展開が目立つ」。男性キャラには制作陣の「願い」が込められているようだと指摘。それを一番感じたのは、戦争で亡くなる寅子の夫・優三の存在という。

心優しい優三は出征前、寅子に「トラちゃんができるのは、トラちゃんの好きに生きることです」と言い残す。この一連のせりふが、法の下の平等をうたう憲法14条を体現していると交流サイト（SNS）などで話題に。渕上さんも、この条文を印象づけた作品性に舌を巻いた。「こんなにも押しつけがましくなく、憲法を身近に感じさせるドラマは見たことがありません」（小川恵、平川翔・共同通信記者）

用語

「虎に翼」　NHK連続テレビ小説の放送枠で４月にスタートしたテレビドラマ。日本初の女性法律家として活躍する主人公・猪爪寅子を俳優の伊藤沙莉さんが演じる。脚本は吉田恵里香さん。日本初の女性弁護士、女性裁判所長であり、家庭裁判所創設にも携わった三淵嘉子さんが寅子のモデルに。寅子が大学で共に法律を学んだ女性らの友情にも注目が集まる。

「交流ますます太く」
我部政男氏　台湾大で蔵書贈呈式

台湾大学への蔵書寄贈で感謝状贈呈式に並ぶ我部政男氏（左から３人目）と台湾大学の陳光華図書館長（左）ら＝６月12日、台北市の台湾大学

【台北】日本近代史研究者の我部政男山梨学院大学名誉教授（85）による台湾大学（台北市）への蔵書寄贈を記念し、同大図書館がこのほど、蔵書贈呈式と学術シンポジウムを開催した。我部氏が台湾大学の陳文章（チェンウェンチャン）学長から感謝状を受け取った。我部氏は「交流がますます太く、深まることを期待している。将来、沖縄・琉球研究のための機関が台湾大学に設けられればうれしい」と話した。

贈呈式の冒頭であいさつした陳学長は、2028年に創立100周年を迎える大学が主要な出来事100選を準備中だと説明した。その上で「我部教授の蔵書寄贈はその中に並べられる可能性がある。これをきっかけに沖縄との学術交流をさらに深めたい」と展望を語った。

陳光華（チェンクワンファ）台湾大学図書館長は、同館がかつての台北帝国大学時代の南洋交通史研究や、琉球王国の外交文書「歴代宝案」の写本などの多くの沖縄関連資料を所蔵していると紹介した。我部氏からの寄贈で「琉球研究の資料が一層充実する」と意義を強調した。

寄贈された3万2千冊超のうち約1万冊は図書館4階の東アジア資料コーナーで、自由に手に取ることができる開架式の書架に並べられている。コーナー入り口の壁面には我部氏が寄贈したことを示すプレートとともに、伊波普猷の『古琉球』など一部の書籍が展示されている。

式典とシンポジウムには大学関係者や研究者らに加え、沖縄と台湾の歴史・文化に関心を寄せる一般人ら合わせて150人ほどが来場した。（ジャーナリスト・李真熙）

写真家菅谷さん　首里城復興記録
那覇で個展28日まで

写真家の菅谷茂さんが23日～28日、パレットくもじ6階の那覇市民ギャラリーで第6回個展「甦る首里城写真展　―いまと復興の道のり―」を開く。

写真展への来場を呼び掛ける菅谷茂さん＝19日、那覇市の琉球新報社

埼玉県出身の菅谷さんは1996年に沖縄へ移住して以来、たびたび首里城に足を運び、その姿を写真に収めてきた。今年10月に首里城正殿などの消失から5年の節目を迎えることを受け、往時を捉えた作品と合わせて、復興過程を記録した写真約35点を展示する。

19日、那覇市の琉球新報社を訪れた菅谷さんは、着々と復興作業が進められている様子は今しか見られない貴重な機会だと強調し、「写真展では正殿復興の進展を伝えたい。また、実際に首里城に足を運ぶきっかけとなればうれしい」と述べた。

入場無料。午前10時～午後7時（最終日は5時）。（当銘千絵）

新刊紹介

山の遭難を検証
「ドキュメント生還2」（羽根田治著）

著者は日本山岳会会員で、山岳遭難や登山技術の著作が多いフリーライター。本作では独りで山に入り6～13日間の遭難の末に救助された4例を検証した。なぜ迷い、山中でどう過ごし、どんな経緯で助かったのか。本人の手記やインタビュー、関係者の聴き取りなどから教訓を探る。

山登りは近年、人気の裾野が広がり、事故の可能性も高まっている。生命の危機に陥った遭難者が語る過酷な体験は、物心両面で新たな事故を予防し、遭難したときの支えになり得るだろう。（山と溪谷社・1760円）

文化史 鮮やかに
「ビジュアル図鑑　魔導書の歴史」（オーウェン・デイヴィス著、辻元よしふみ・辻元玲子訳）

「魔導書」という怪しげな響きから想像する魔術の世界。ただ本書は想像を超え、その歴史は宗教、科学、活字文化、植民地主義にも通じると説く。250点超のカラー図版からも多様な文化史が鮮やかに立ち上がる。

「ビジュアル図鑑　魔導書の歴史」より

妖精の王を、太陽光を使い葉に印刷した現代の作品は、精霊召喚の指示が書かれた16世紀の魔導書に着想を得た。時を超え、人の心を引きつける不思議な力が伝わる。

パピルスに記された恋愛の魔法、戦争を扱う占星術、漫画の中の魔法まで登場する魅惑の一冊だ。（河出書房新社・6490円）

落ち穂
2024年７月24日

ハーレムブルース

宮里　恵（ピアニスト）

マンハッタンは大きな一枚岩の島で、岩の一角がセントラルパークで少し顔を出す。平坦なアッパーウエストから起伏に富んだハーレムまでのエリア、地下鉄1番線沿線上を私は転々と住み歩いた。

留学直後の短期間を過ごしたドミニカ系移民の街145丁目は至る所でラテン音楽の強いリズムとスペイン語が聞こえ、看板もちらほらスペイン語混じり。留学したのはカリブの島だったかと一瞬混乱するほど、異国の地アメリカで別の異国の情緒を感じた。

その後すぐにアフリカ系アメリカ人が多く住むハーレムへ。目抜き通りの125丁目には有名なアポロシアターの他、ショップやレストランが並び、流れる音楽もR&Bやソウルがメイン。夏には上半身裸で歩く筋骨隆々な黒人男性を多く見た。外での飲酒は禁止だが半裸には寛容な不思議の国、アメリカ。

私の棲家はその125の西端のインターナショナルハウス（通称アイハウス）という大学院生や学者、インターンを対象とした寮だった。一般的な寮とは違い、世界各国からの入居者達と国際交流を目的とする志高き場所で、カフェテリアやバー、音楽ホール、講堂、ジムまであり収容可能人数は700人。私の部屋からはハドソン川の先ニュージャージー州まで見渡せ、独立記念日には花火を、雪の日にはようよう白くなりゆく川ぎわの景色を楽しめた。そんな巨大な場所なので当然、住人達も個性的な面々だった。教師志望のテキサス人は超常識人。勤勉なイラン人はイスラエル人からピアノを習い、サンドイッチの肉がポークではないかと常に疑い、時にお嬢育ちのユダヤ系アメリカ人と自分のバターを勝手に使っただの云々で揉めていた。韓国男子はトラップに掛かったネズミに情が湧きピーナツを与え飼育、若いフランス男子はパリの自慢をし、精神科医のドイツ人は少し風変わりだった。

ある日ルームメイトの片付け下手なノルウェー人Tが大量の皿をシンクに放置したまま休暇で国に帰ってしまった。途方に暮れる日本人の私。こんな国際交流は嫌だ。だが数時間後、皿が消えていた。

短信

安藤忠雄財団賞決まる

環境・社会問題などの解決に尽力する個人や団体を表彰する第10回安藤忠雄文化財団賞が、リサイクルを軸としたビジネスに取り組む企業「ＪＥＰＬＡＮ」（川崎市）の岩元美智彦会長に決まった。賞金は100万円。独自の技術で循環型社会を目指す活動が評価された。

俳句はいま
浅川芳直

俳句評論の役割の一つは、俳句史に寄与することだ。名句の鑑賞が本質論を生み、実作者も論に刺激されて表現が深化してゆけば理想的である。

しかし、実際の俳句史はそのような理想的プロセスによって駆動するとは限らない。名句鑑賞論だけでなく、俳句を巡る環境について提言を行う「論」も時には必要だ。

昨年末刊行の筑紫磐井「戦後俳句史ｎｏｕｖｅａｕ１９４５―２０２３　三協会統合論」（ウエップ）は、戦後俳句史を本質的な主義主張の問題で記述できるのは前衛と伝統の対立までだとし、以後は協会や俳句雑誌の動向を巡る「俳壇史」だと指摘する。現在、日本の大きな俳句協会には最も古い現代俳句協会、そこから分裂した俳人協会、別系統の日本伝統俳句協会がある。三協会はそれぞれ俳諧自由、伝統、花鳥諷詠という俳句観のもと互いに論争をせず、俳句評論も安定志向となった。ゆえに平成以降は「俳壇無風」状態となり、俳句史は停滞している。

筑紫はこうした認識から調査を行い、後発二協会の誕生は、俳句観の対立によるのではなく、世代対立や新聞俳壇の選者を巡る属人的問題だったことを示す。その上で、分裂の発端が属人的問題に過ぎないなら、「三協会統合」によって異なる考えの俳人を同一協会に集め、おのおのが活発に議論せざるを得ない状況をつくればよい、と説く。

三協会統合巡る特集など　取り巻く環境も議論を
7月

現代俳句協会では、俳人協会評議員の筑紫が副会長を務めているが、今年新たに日本伝統俳句協会常務理事の星野高士も副会長に就任。協会統合に向けた布石にも見え、６月発行の「ＷＥＢ俳句通信」では三協会統合を巡る特集が組まれた。特集で驚いたのは、西池冬扇や富田正吉らが積極的な立場を表明していることだ。堀田季何は高齢化による各協会の会員減少の観点から、統合に係るガバナンスコストなど課題の早期検討を主張する。

筆者自身は、俳壇無風であっても作品が停滞しているとは思わないが、仮にそうだとしても、三協会統合が俳句を活性化する有効な手だてかどうかは不明である。ただし、堀田が指摘する高齢化社会が、すでに地方の俳句の振興活動継続を厳しいものにしていることは明らかだ。作品論だけでなく、俳句を取り巻くさまざまな環境も真面目に考える必要があるのは間違いない。（俳人）

どら蔵
〈237〉

朝井　まかて

第六章　来去来（二十一）

「師走に続々と御礼が集まってくるやなんて、さすがは師匠、年越しに何のおいといもおまへんな。実は手前もようやく、借金をお返しする目処がつきました」

「それは重畳。手紙商いでよう稼いだの」

「へえ。おかげさんで贔屓客も増えて、あんじょう回ってます」

船宿の隠居夫婦がすっかり寅蔵を気に入ってくれ、勧めるままに買い取ってくれる。染大夫にも割前は必ず運び、すると座元が贔屓客になってくれた。薬売りのお頭の重兵衛からの注文も増えている。秋の終わり頃だったか、ご当代の大樹公が隠居なさるとの布告が出たとかで、明年、将軍の代替わりがある。大名や旗本とすれば世子家慶公の幕内に入るべく根回しの嵐、すさまじい勢いで音物が行き交っているという。

だがその一方、秋から諸国で頻発した風雨洪水の被害は増すばかり、客と相対していても「飢饉」の言葉を聞かぬ日はないほどだ。十月の半ばには神田佐久間町にもお救い小屋が建てられ、けれど寅蔵はそんな不穏な騒ぎにも慣れてしまった。師匠への借金を綺麗に返して一休禅師のあの一行を手許に取り戻したい。その一念だけで売買に走り回ってきた。

「今日はいよいよ、お返し申します」

「相わかった。金子はわしの部屋に置いておいてくれ」

「一行は」

「権兵衛に預けてある。今日、顔を合わすゆえ話は通しておく。近いうちに取りにゆくがよい」

「親分のとこにあるんだすか」

肩透かしを喰らった気分だ。

「案ずるな。あやつは他人の物を盗んだりせぬよ」

騙すけどなあ。

玄関で訪いが聞こえ、婆さんが杓文字を置いて出て行った。小走りで戻って、

「炭屋さんの番頭さんがお越しです。駕籠を仕立ててくだすってますよ。よござんしたね。雪に足を取られてすっ転んじゃ、目もあてられない」

画・瀬知エリカ